

水稲田植え後の栽培管理のポイント

4月27日発表の東北地方の1カ月予報では、期間の前半は気温がかなり高くなる可能性があります。向こう1か月の天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多い確率となっています。また、平均気温は高く、降水量は平年並みまたは少なく、日照時間は平年並みまたは高い確率となっています。

良食味・高品質米の安定生産には、強勢茎(中苗では主茎と第3～6節1次分げつ、稚苗では主茎と第2～5節1次分げつ)を主体とした目標穂数につなげる初期生育の確保が重要です。

—基本技術の励行と田植え後の水管理で初期生育の確保を—

早期の有効茎確保には、温暖日の田植え、栽植密度の確保(70株/坪)や植え付け本数(中苗3～4本、稚苗4～5本)、植え付けの深さ(中苗・2.5cm、稚苗・2cm)、土壌にあった基肥窒素量など基本技術の励行のもと、活着と分げつを促進させる水管理で有効茎歩合の高い稲づくりに努めてください。

《田植え後から活着までの水管理》

◎苗の活着(通常では4～5日で活着)は気温・水温が高いほど早くなります。

○この時期の水温は、気温に比べて日平均で3～4℃高いので、田植え直後の水深は4cm程度とし、保温効果を高めるためにできるだけ湛水状態を保ちます。

○長期間の深水はかえって地温が上がらず、生育を悪くするので田面の均平をはかり、苗が水没しないように注意してください。

《初期生育・茎数確保のための水管理》

◎分げつは、日平均水温で23～25℃、日気温較差が大きい場合に促進されます。

○活着を確認したら、分げつを促進させるための浅水管理とし、水温と地温を高め、日気温較差を大きくします。このため、水の入れ替えは水温の低い早朝に短時間で行ってください。

○かんがい水温が低い地帯ではポリチューブや迂回水路などで水温上昇に努めてください。

【除草剤の適正・安全使用】

○河川の水質保全などを考慮し、田植え前の初期除草剤は使用しないでください。雑草が多いと想定される場合には、移植後の初期除草剤と一発処理除草剤との体系処理を行ってください。使用にあたっては、処理時期・処理量・水管理などの使用基準を守ってください。

○除草剤散布後7日間は止め水とし、かけ流しや排水路への落水はしないでください。また、降雨などによって除草剤が流出しないよう水管理を徹底してください。

○近年は気象変動が大きく、除草剤の使用が適正に行われな場合があります。水田内に多く残草すると収量や品質の低下を招き、さらにはアカスジカスミカメなどによる斑点米の発生も助長するので、除草剤の適正使用に努めるようにしてください。

【余り苗は速やかに処分】

○余り苗・放置苗はいもち病の伝染源となるので、圃場に埋没するなどして速やかに処分してください。

○極端な欠株がない限り補植は行わないでください(事前の圃場条件整備と適正な田植えが肝心)。

※詳細については、JA営農センターや地域振興局農業振興普及課にご相談を

お問い合わせは 米穀部米穀総合課(小松) 018-845-8034 へ



JA全農あきた 営農支援部 TEL018-864-2462.
営農支援課

もっと近くに。